

---

# コミュニティを探して

( 2 )

藤 信子

コミュニティとは何か、ということ考え始めると意外に難しい。はじめは「地域社会」「地域共同体」というような意味だったところから、現在では少なくとも私が主として考えるもとにしているコミュニティ心理学では「関係的コミュニティ」(機能的コミュニティとも呼ばれる)を扱っているようである。私が探しに行きたいコミュニティについては Klein,D の「コミュニティは、安定と身体的安全を手に入れ、ストレス状態にあるときには支持を引き出し、さらにライフサイクル全体を通じた個性と重要性を獲得するなどを目指す人々の間での様式化された相互作用である」(植村・高島・箕口・原・久田 2006)、という定義がしっくりくる。いろんな定義が

あるが、「帰属意識」「連帯ないし相互扶助」などがキーワードのようである。

コミュニティを地域社会と関連付けてしまうのは、もともとは住んでいる地域に帰属意識を持ちながら、相互扶助が行われていたという機能に注目しやすいという点にあると思う。しかし少なくとも日本では、太平洋戦争以後、都市の住民は会社の福利厚生に抱えられ、地域住民としての連帯は乏しくなった面があったのではないだろうか。私は今まで住んできた数か所で、町内会に入っていたが、そこでの活動は、回覧板、年に1回くらいの町内の掃除、火の用心くらいが、主な活動だった。どうしようもなく、役員が回ってくる時でも、半年に1度集金をしたりしていた。

当番だと言われ、役目を果たすだけで、今思うとシステムを何も知らずになんとなく過ごしていたのだと思う。町内会のメンバーはそれぞれが違うところで働いているため、拘束力が弱くないと、私たちのような住民の町内会は出来ないのだろう。そのようなところでは帰属意識はあまり持ちえないのは当たり前だと思う。そのような経過の中で、地域と共同体を結びつける意味は薄れていったようである。その代わりに「連帯・相互扶助」の関係をもちうることで「帰属意識」が生じるような、機能的コミュニティが生まれてきているのではないか。しかしこの機能的（关系的）コミュニティが、住民の相互扶助を十分に果たしているかと言えば、そこから外れる人が多くなっていることが、現在の問題なのだと思う。職場というある種の共同体に十分に抱えられない人が増え、町内会のような住民としての共同体は拘束力がないため、町内会に入らない人も多くなっていると聞く。一人暮らしの人にとって、町内の仕事をする余裕は十分には無いと想像できる。では、少なくとも町内での相互扶助を考える場合、会の在り方を「一人でも入れる町内会」などを目指して変えているかというところだろう。

昔の村や町の組織、町内会と少し雰囲気が違うのが、子ども会だろうか。うちの町内では、団地の棟と棟の間に鯉のぼりを下げることをして、バーベキューをするのが慣習のようである。これはイベントを行うということ

を通して关系的コミュニティができていたと考えられる。ただこれは家族がいるからの話であるため、「一人でも入れる」とはならない。子ども会のような关系的（機能的）コミュニティがイベントを中心として集まるとすると、「場所」がありそこに立ち寄るといった形のコミュニティは考えられないだろうか。私はこの6年ほど、あるデイサービスセンターを月に1度大学院生と一緒に訪問している。この1時間ほどの交流だけれど、今まで地域のことをほとんど知らないこと、30-40年前の生活を忘れていたことに気付かされる経験をしている（藤 2012）。利用者の話から京都の町の中の伝統産業の実感や、町の移り変わりなどを体験している。続けて通う中で、生活のいろんな面に触れることができる豊かな時間だと感じている。若い大学院生が知らない歴史に自然に触れることができることも、貴重な経験だと考えられる。そのような経験を通じて、いろんな世代の人が交流できる場所（時間限定でもよい）があればよいと考えている。

広井（2009）によると「地域における拠点的な意味を持ち、人々が気軽に集まりそこで様々なコミュニケーションが生まれるような場所」としての、「コミュニティの中心」として重要な場所はどこかというアンケートに対して、学校、福祉・医療関係施設、自然関係、商店街、神社・お寺という結果だったという。この福祉・医療関係というのを見て、私の交

流の場所というイメージが進んでいく。高齢者・障がいのある人の施設・保育所などは鉄道などの駅のそば（あるいはその建物の中）に優先的には入れるようにすべきだ、と日頃から思っている私としては、よりイメージが膨らむのである。それは、交通の便利な所にあるという利便性と、他の人も立ち寄りやすいことで交流が進むことが、大事なことだろうと思うところからきている。高齢者や障害があったり、年少であるため移動に援助がいる人が多い場合、人が立ち寄れる場所にいることで、自らが出かけなくても人と出会えることは大事なことだと思う。高齢者の福祉施設を、地域の中心において、立ち寄って交流する場所にできないか、その中で若い人が教えてもらうことも多いだろう。そして、なんとなく一人である時、立ち寄れる場所ともならないかと思う。施設、責任、財政などどのようなところから考えても難しいようだけれど、しばらくイメージしていきたい。

#### 文献

植村勝彦・高島克子・箕口雅博・原裕視・久田満  
(2006) よくわかるコミュニティ心理学 ミネル  
ヴァ書房

広井 良典 (2009) コミュニティを問いなおす一つ  
ながり・都市・日本社会の未来 ちくま新書

藤 信子 (2012) 私の・外のグループ、内のグループ 集団精神療法 27 (2) 112-117